

水を引く

日照りで水不足の時には、川から水を引いてくるのが考えられます。しかし、それを実現するためには関係者間の調整や人々の協力、技術、資金などが必要になります。小学校の社会科副読本に、地域の先人が努力して人々のために水を引いてきた事例が示されています。徳島県三好市の西州津用水と高知県安芸市の栃ノ木堰用水の例をご紹介します。

■西州津用水（徳島県三好市）

明治 27 年（1894）頃、日照りが続き、箸蔵地区では農作物が枯れ、飲み水にも困りました。三人の青年（森本半次、森本磯太郎、萩田勘平）は、鮎苦谷（あゆくるしだに）川から取水して経塚山にトンネルを掘って用水路を通す計画を立てました。村人に説いて回りましたが、賛成してくれる人はいませんでした。三人は自分たちの財産を投じて用水路をつくることを決意し、明治 29 年に測量を開始、翌年からつるはしとのみで工事を始めました。途中から川人近蔵が加わって四人で工事を進め、大雨でトンネルが崩れるなどしましたが、困難を乗り越えるうちに村人も協力するようになり、明治 32 年に西州津用水が完成しました。西州津用水に功績のあった四氏を讃えて、大正 14 年に養水路記念碑が建立されました。〈池田町社会科副読本編集委員会編「わたしたちの町池田」1998 年〉



■栃ノ木堰用水（高知県安芸市）

安芸川には古くからいくつかの堰があり、各地で安芸川の水を利用していましたが、大正時代に米づくりが盛んになると水が足りなくなりました。特に日照りが続くと、安芸川の水が減り、水を取り合う水争いが何度も起きました。代表者が話し合いを重ねた結果、堰を一つにして栃ノ木堰で取水した水を用水路で下流に流してみんなで利用する計画を立て、耕地整理組合をつくり、工事を高知県にお願いすることにしました。栃ノ木堰は高知県で初めて水中コンクリート工法でつくられ、大正 12 年に工事を始め、7 年間かけて昭和 5 年に完成しました。人夫約 9,500 人を要した大工事でした。昭和 42 年に栃ノ木堰記念碑が建立されました。〈社会科副読本改訂編集委員会編「わたしたちの安芸市」2012 年〉

